『ルーツ』から「ネイション・オブ・イスラム」へ

荒このみ

1　黒い回教徒

今からおよそ四五年前、一九六〇年前後から、マルコムXの属していた「ネイション・オブ・イスラム」に関する記事が、日本の新聞でも報道されるようになっていた。「ネイション・オブ・イスラム」の有能な導師の一人で、スポークスマン的存在だったマルコムXの写真が掲載され、日本のメディアによって描き出されたその男の印象は、怒り顔の恐ろしそうな黒人だった。「白人は悪魔だ！」と叫びながら、マルコムは腕を振り、指差しながら、険しい形相で黒人集会で演説をしている。いや真剣な表情だったのかもしれない。その様子を伝える日本のメディアは、おそらく当時の、白人によって牛耳られたアメリカの主要メディアの論調をなぞっていたのだろう。戦闘的な、そして非論理的なかれら「アメリカの黒人」の、さらに非論理的で非文化的な、そしてキリスト教の敵である宗教が、アメリカの「ニグロ」の間に、今、活気を帯びて息を吹き込まれつつある、という口調だった。そのような記事報道の姿勢のなかには、白人のアメリカの「黒い回教徒」に対するいわれのない脅威があったのだろう。リアルタイムで記事を目にしたときはまだ中学生だったから、そのときそう感じたのではない。そのように理解するようになるのは、アメリカ研究にたずさわるようになってからである。当時の「黒い回教徒」への反応には、まるで二〇世紀半ばに奴隷の反乱が起きてしまった、というような雰囲気すらあったと思われる。

マルコムXは一九六五年に暗殺される。この暗殺事件を報道している朝日新聞は、ニューヨーク特派員電を載せているが、それもまた「黒い回教徒」の名称に恐怖を募らせるような語調であった。情報が少なく、「アメリカの黒人」への理解がアメリカ社会のなかでさえ希薄だった時代に、ニューヨーク駐在の日本のメディア関係者にとって、マルコムXの存在を何も知らない日本の読者へ伝達するのは、まったくのところ至難の技であっただろう。暗殺を報道する記事で、「一部黒人たちの間に見られる過激な暴力主義――血なまぐさいテロリズムへの依存――をのぞかせているようだ」（朝日新聞、一九六五年二月二三日）という感想を述べている。この暗殺は、黒人同士の暴力主義のあらわれであり、かれらにはテロリズムの傾向があるというような記事になっている。後に述べることになるだろうが、マルコムXの暗殺者とその背後関係については、その調査が十分に行われず、曖昧なままである。いったいだれがマルコムXを殺したのか。その実行者の逮捕に関しても謎の部分が多い。実行者の背後に関する情報についてはさらに不透明化されてしまった。それはなぜなのか。

一般に、人々に強い影響力を及ぼす組織が生まれてくるのは、社会を統御する側からすれば便利でもあるのだが、不便でもある。その組織が、統治者にとって脅威になる可能性を常に秘めているからである。とりわけ、アメリカの人口の一割五分を占めるアフリカン・アメリカンの組織が巨大化、あるいは強力化すれば、その組織が体制に順応しているかぎりは安泰だが、体制に反対の姿勢を取れば、当局は恐怖を感じるようになる。そのような背景が、マルコムXの暗殺に認められなかったと断定することはできない。それどころか、そのような疑惑の暗雲は、重く垂れ込めていたのだった。マルコムXの暗殺を、黒人同士の内輪もめに帰してしまいたいという姿勢が、「黒人のテロリズムの傾向」という言葉に収斂されていると言えるのではないか。そのようなメディアの意図的な文章が、おそらくアメリカのメディアを支配していたのだろうが、それは白人勢力が支配している当局にとっては都合がよかったにちがいない。そしてもちろん、逆方向の力の行使があって、メディアもまた支配されていたのかもしれない。

暗殺されたときには、「黒い回教徒」組織とマルコムXは、すでに決裂していたのだったが、決裂してマルコムXが別の組織を作った後、一年もしないうちの出来事だった。アフリカン・アメリカンのイスラーム組織に関しては、「ネイション・オブ・イスラム」の誕生・展開・発展・変化・復活という変遷過程を通して、今日、二一世紀にいたるまでの歴史を語らねばならない。アフリカン・アメリカンの信奉者を多く集めている「ネイション・オブ・イスラム」の存在は、アメリカ社会における特異な現象として論じる必要があるだろう。それは宗教組織であるとともに、社会組織としての特異性であり、そこにアメリカの歴史の特殊性が関わっている。すなわち、「ネイション・オブ・イスラム」の研究は、イスラームという宗教の研究であるばかりでなく、アメリカ研究として特別の位置を占めているのである。

今日、推定六百万人のイスラーム教徒がアメリカに暮らし、そのうち四〇パーセントがアフリカン・アメリカンであると見なされている（スミス、xii-xiii）。そこから類推すれば、「ネイション・オブ・イスラム」は二百万人ほどの信者を抱えていると推定できるのではないだろうか。おもにアフリカン・アメリカンを信奉者として抱える「ネイション・オブ・イスラム」を、本来の意味でのイスラーム教徒の集団ではない、と弾劾し抹殺してしまうのはたやすい。だがそのような排除をすれば、それではアメリカ社会における正統派イスラーム教徒とはいったいだれなのか。何が正統なのかという問題が生じてくる。「ネイション・オブ・イスラム」を、アメリカ化した「イスラーム」の一派と見なさねばならないというのが、私の主張である。アメリカのイスラーム教徒を考えるにあたって、「ネイション・オブ・イスラム」の意味を無視することはできない。とりわけ私たちが生きている二一世紀、そして未来においてアメリカではどのように、「イスラーム」現象が展開していくのかを考えるときに、「ネイション・オブ・イスラム」は十分に考察の対象になるばかりでなく、とりわけ注目せねばならない組織である。

この論考では、二〇世紀半ば頃からのアメリカ社会における「イスラーム」現象に焦点を当てるつもりである。だがその前に、アメリカ社会と「イスラーム」のかかわりについて、少しばかりの概観をここ

ろみたい。

2　アメリカにおける「イスラーム」の歴史

コロンブスがアメリカ大陸を「発見」した一四九二年頃から、すでにアメリカ大陸の海岸に、スペインから逃れてきたイスラーム教徒が到着していたという説がある（スミス、205）。その後、一六一九年には、アフリカ大陸から黒人奴隷が初めて連れて来られるのだが、その後、多くの黒人奴隷が売買されアメリカ植民地に入ってくる。それとともに、イスラーム教徒の黒人奴隷も増えていったことだろう。強制的に連れて来られた黒人奴隷のうち、二〇パーセントがイスラーム教徒であったと主張する歴史家もいるようだが、この数字は高すぎるとジェイン・I・スミスは反論している（スミス、76）。アラン・オースティンによれば、一七世紀から一九世紀にかけて西アフリカで捕獲され、奴隷にされてアメリカ大陸へ連れて来られたアフリカ人のうち、七、八パーセントがイスラーム教徒であっただろうと推定している（ターナー、12）。

かれらのイスラーム文化は、二〇世紀には消えてしまい、西アフリカからの黒人奴隷がアメリカ合衆国にもたらした古いイスラーム文化表象は、次の世紀までは生き残らなかった。けれども、ここで一人の研究者アラン・オースティンの研究発表が、「クンタ・キンテの仲間たち」（1988）という題目であったことに注目しておきたい。クンタ・キンテとは、アメリカの黒人奴隷の個人的なルーツをたどって大評判になった、アレックス・ヘイリーの『ルーツ』（1976）の主人公、アレックス・ヘイリーの先祖の名前である。そしてアレックス・ヘイリーが、マルコムXの『自伝』を書いた作者だということも思い出しておきたい。『ルーツ』は小説ではなく、ヘイリー自身が自分の家系を探してアフリカの部族までたどっていき、その結果、発見した事実を述べているという前提になっている。とはいえその物語性は否定すべくもなく、いわゆるドキュメンタリーではない。

アレックス・ヘイリーの『ルーツ』

七〇年代後半に、『ルーツ』は大評判になり、その結果、白人の間で特に、自分のルーツ探しが大流行するという社会現象まで起きたのだった。だがここで注目されるのは、アレックス・ヘイリーが、自分の出自を明確にすることができたという事実、祖先が不明であった奴隷の過去を持つアフリカン・アメリカンが、家系をたどることができたという事実である。それが、まず第一の驚きであったことはたしかである。だが第二の驚きは、アレックス・ヘイリーの先祖がイスラーム教徒だったということではなかっただろうか。一九七〇年代のアメリカ社会で、イスラーム表象を持ち出すことへの抵抗は大きかったに違いない。すでにアメリカ社会は、「ネイション・オブ・イスラム」の誕生・展開・内輪もめを見てきたのだが、キリスト教の精神が絶対的基盤をなすアメリカ社会で、今日のアメリカ市民である黒人の祖先が、イスラーム教徒であったという事実は、世間にいかなる反応を呼び起こしたのだろうか。

その点を作家のヘイリーが意識していなかったはずはない。その上で、自分の祖先はイスラームであると表明したのだった。アフリカの

小さな部族の宗教ではなく、世界の宗教になっていたイスラーム教であるところに、その意味はあったのだった。

『ルーツ』は、主人公のクンタ・キンテが生まれた一七五〇年まで、年代を特定している。だが家系図ではさらに、クンタ・キンテの祖父にあたる聖者の名前までたどられている。その調査の緻密さ、そして発見の喜びと驚きが書き込まれた本書は、「ルーツ探し」の面白さを十分に伝えて読者の好奇心をそそったのだった。だが今日、『ルーツ』を読み返してみると、これはアメリカに強制的に連れてこられたアフリカ人の、アメリカ社会への文化的・宗教的順応の過程をたどった物語であるという、また別の側面に気がつくのである。

第一章の冒頭から、クンタ・キンテの家系が、代々、アッラーに仕える聖者の家系であったことが記されている。

「一七五〇年の春まだ浅いころ、西アフリカのガンビア川の川岸を上流へ四日ほど遡ったジュフレ村で、オモロとビンタ・キンテに男の赤ん坊が生まれた」(11) という書き出しは、アメリカ文学の「スレイヴ・ナラティヴ」の代表作とされる、フレデリック・ダグラスの『自伝』によく似ている。ダグラスの場合は、年月は不明だったが、地域を特定する描写は、きわめて詳細に記されていた。地域の特定は、自己証明の重大な側面なのである。続いてヘイリーは、男の子の誕生がとりわけ意味を持つことを描いている。「最初に生まれた男の子は、アッラーの特別なる祝福を、両親のみならず家族へもたらすという言い伝えがあった」(11)。このように最初の段落から、先祖はイスラームの神を信じていたことを作者は明らかにしたのだった。

第五章になると、祖父の物語になる。祖父のカイラバ・クンタ・キンテは、大聖者から祝福を受け聖者になったのだが、キンテ家は、「数百雨の昔、古マリ王国に遡るころから、代々聖者になるしきたりであった」と、祖母が主人公のクンタ・キンテに語るという形式で、アッラーを祭る高僧の家系であることを誇り高く叙述している。そのように、先祖の祖国のアフリカでは、首長や王子やプリンセスで、誇り高い家系であったにも関わらず、アメリカでは奴隷の身に貶められているという前提は、これもまた、とりわけハーレム・ルネサンス期のアフリカン・アメリカンの詩・小説に見られるのだが、それは人間性を剥奪されていた奴隷時代の過去への、条件反射的な逆反応であったのだろう。ヘイリーは、だがそれを宗教的生活での上層という前提にする。宗教へのこだわりに、私はやはり、二〇世紀の後半に生きるアフリカン・アメリカンとキリスト教を基盤にするアメリカ社会との段差・不調和を感じ取るのである。

『ルーツ』は、イスラーム教徒だった主人公が、奴隷捕獲人に捕まり、奴隷船に乗せられて、アメリカのプランテーションへ売られていく物語であり、アメリカ植民地からアメリカ共和国になり、奴隷制度の時代、その廃止という歴史的流れを背景にしている。その時間の推移のなかで、先祖のアフリカ人クンタ・キンテの物語が、二〇世紀の子孫である著者の代まで伝えられる。

クンタ・キンテを含め、各地から捕獲された人々は、奴隷船に乗せられ、新大陸へ運ばれていった。暗い船倉に押し込まれ、絶望的になったかれらは、アッラーへの祈りをあげる。「クンタ・キンテのまわりでは、男たちがアッラーに向かって大声で叫んでいた…クンタもその大声に混じって、聞いてくれ！　助けてくれ！　と叫んでいた」(173) のだった。

アメリカ上陸を前にして、マンディンカ部族の男が、ふたたびアッラーに向かって祈りの大声をあげる。「マンディンカの男の一人が、アッラーを讃える叫びをあげた。するとじきに全員が、この男に唱和した――アッラー讃美と祈りの声が、必死に揺する鎖のガチャガチャ鳴る音に混じっていた」(208)という描写は、「もはやアフリカを目にすることはないだろう」(173)という思いの前で、部族の宗教であったイスラームへの最後の祈り、イスラームとの決別を余儀なくされることになる、アメリカでの奴隷としての暮らしの前兆になっていく。

作者ヘイリーは、アメリカ大陸への上陸を前にしたクンタ・キンテに、次のように語らせている。「それは間違いなくアッラーの土地だった・・・大昔の先祖たちからの語り伝えでは、日の出から日の入りまで伸びている土地だった」(207)。このように、イスラームの神が、アメリカ大陸の存在を予測していたと強調する作者の意図は何か。クンタ・キンテの物語を通して、アメリカ大陸をもイスラームの神が見ていたと指摘しているのであり、キリスト教化してしまう以前のアメリカは、アッラーのなかに存在していたと主張しているのである。

このような発言は、ルーツ探しの関心の前で、多くの読者からは注目されずに消えてしまったが、ヘイリーは、アメリカにおけるイスラーム・プレゼンスを十分に書き込み、表現していたのだった。

いっぽう、クンタ・キンテのアメリカでの生涯は、奴隷として酷使されるなかで、祖国アフリカの宗教を忘れ、言葉を忘れていく過程だった。

プランテーションへ売られていったクンタ・キンテは、肌の色の白くない、アフリカ人のような人々を見る。ところがかれらは、「豚肉を食べていた。ということはみんなアッラーを知らない余所者なんだ――それとも裏切り者たちか」(229)と疑念を抱き、自分が知らぬうちに豚肉を食べさせられてしまうのではと恐れて、前もって「アッラーの許し」(229)を乞うのだった。ここで初めて、クンタ・キンテはアッラーの教えを守っていくことの困難に遭遇している。

そればかりか、アメリカ化はすぐにクンタ・キンテを襲ってくる。「おまえ、トビーだ。トビーよ。ご主人さまが言ってるだよ。お前の名前、トビーだって！」(232)、と怒鳴られ、「クンタ・キンテだ。オモロの最初の息子で、オモロは聖者カイラバ・クンタ・キンテの息子だ」(232)と抵抗するものの、もちろん理解されない。この命名の行為こそ、奴隷化の一歩である。存在証明の根源にある個人の名前を、自分の意志とかかわりなく、権力によって変更させられてしまったのである。新しい名前は、先祖と強制的に断絶することを要求し、クンタ・キンテという名前が持つ、アッラーを守る聖者の家系を忘却するように強いたのだった。後に、マルコムXがマルコム・リトルから名前を変えたのも、そして六〇年代・七〇年代のアメリカ社会で、名前の変更がアフリカン・アメリカンの間で急激に広まったのも、奴隷時代の白人権力の否定をする必要があったからである。

クンタ・キンテは、アメリカに強制的に連れて来られてからも、アッラーへの祈りを忘れなかった。折りにつけアッラーへの祈りを静かに口にし、日々の五回の祈りを忘れなかった。「クンタは小屋へ戻り、夕べの祈りを唱えたあと、床の地面に棒切れでアラビア文字を書いた・・・そしてアフリカでしていたように、新月のあとの朝に、ひょうたんのなかに小石を落として時間の経過を認めていった」(279)。クンタ・キ

ンテはこのようにして、すでにアメリカ化していた奴隷と自分の距離を保ちながら、アフリカ人としての自負と存在証明を保ち続けていたのであった。

けれども五四章で、二〇雨を経て二〇歳になったころのクンタ・キンテは、徐々にアフリカ人であることを忘れ、アメリカ化してくる。クリスマスの季節になったころ、「黒人のアッラーへの気持ちは変わらなかったが、みんな楽しんでいるんだから、ちょっと祭りのようすを覗いても、アッラーは反対しないだろう」（288）と自己説得するようになっていった。そしてじきにイスラームの神のことを忘れがちになっていく。六二章では次のように、その変化が描かれている。

「ガンビア川や村の人々の記憶が精神のよりどころであったころは、クンタ・キンテはまだアフリカ人だった。ところがこのごろでは、何ヶ月もジュフレ村をすっかり忘れてしまうことがあった。激怒する事態に直面するたびに、跪ずいてはアッラーに力と理性を与えてくれるように祈っていた、あの初めのころは、まだアフリカ人だった。アッラーの教え通りに祈りをあげたのは、いつのことだったろうか」（328）。

白人の言葉を学びはじめたときから、マンディンカの言葉が出なくなり、白人の言葉で考えるようになった自分を発見してクンタ・キンテは愕然とする。けれども唯一の誇りは、二〇雨（年）というもの豚肉を食べたことはないという点であり、自分自身を見失っていないとすれば、それは「尊厳」を持ち続けていることだったと省察している。

新しい言葉の習得とともに古い言葉を忘れていくのは、人間にとって当然のことだろう。重要なのは、言葉の習得とは、単なるコミュニケーションの道具を身につけたということではなく、言葉の背後の文化を身につけるということである。それを学びとるということである。するとクンタ・キンテの場合は、まさに自分自身の奴隷化を認めることになってしまうのである。クンタ・キンテがトビーと命名された行為は、まさに黒人（アフリカ人）のアメリカ化、すなわち奴隷化の事実を象徴していたのだった。

アメリカ化の行為を作者ヘイリーは次々に書き込んでいる。クンタ・キンテは農場で知り合った奴隷女のベルと結婚することになるのだが、すでにアメリカ化してキリスト教を信じていたベルは、キリスト教の神の祝福による結婚を希望する。なぜなら、「ご主人さまがおっしゃるには、結婚とは、イエス・キリストの御前での聖なる行為」（347）だからである。このところの描写は、歴史的事実と異なるところがあるだろう。多くの場合において、南部の農場にいる奴隷たちが、正式に結婚することなど認められていなかったのだ。クンタ・キンテとベルの結婚は、キリスト教の神の御名による祝福を受け、「イエスの御前で、結婚の神聖なる国に二人は飛び込んだ」（348）のだった。

クンタ・キンテは悩まなかったのではない。ジュフレの村で執り行われる結婚式の様子を思い出しながら、胸の詰まる思いになるのだが、「今の自分がしていることを許してくれるだろう。異教の神にいかなる言葉が捧げられていようとも、自分は、アッラーを、アッラーのみを信じていることをわかってくれるだろう」（348）と述べている。

この叙述は、すでにクンタ・キンテがかなりアメリカ化・キリスト教化していることの証だろう。結婚というだれにとっても人生の一大転換点において、クンタ・キンテはキリスト教の祝福のもとに跪いたのであった。さらにもう一つの出来事を作者は書き入れている。

プランテーションから五マイル離れたところにある、ウォーラー・ミーティングハウスという、農場主の名前をつけた礼拝堂へ、ご主人を馬車でお連れするのがクンタ・キンテの仕事になっていた。そのように物理的に教会との接触を持つようになっていたのだったが、そのうちに、仲間の奴隷たちが、夜に行っているキリスト教の礼拝を知るようになる。クンタ・キンテにとって異教だったキリスト教だが、しだいにキリスト教になじんでいく様子が描かれている。そしてクンタ・キンテのキリスト教化・アメリカ化がもっとも象徴的に説明されているのが、第七三章のキャンプ・ミーティング（野外の宗教集会）の場面だろう。

「それはプランテーションへ来ていらい、毎年開かれていて、黒人にとっては夏の大きな行事だった。いつも口実を作って参加しなかったから、またベルが誘ってきたときには、そのしつこさにあきれてしまった。この大集会でどんなことが起きているのか、それがベルの異教の信仰と関係があるというぐらいしかわからなかった。だから関わりたくなかった」（391）と考えていたクンタ・キンテだったが、結局は、ベルの策略でキャンプ・ミーティングに参加する。身体を揺すり、掛け声を交し合う情景に、故郷アフリカの長老会議を思い出しているクンタ・キンテだが、妻のベルが息子に洗礼の儀式を受けさせるのを目にするうちに、やがてはアフリカの習慣や宗教は忘れ去られ、クンタ・キンテの子孫たちが、キリスト教化していくであろうことは予測されるのである。

「あれはあたしのアフリカ人の旦那よ」（397）、「あのアフリカ人」（407）と妻のベルや、周囲の奴隷たちから呼ばれているクンタ・キンテ自身は、第七六章にいたってもアッラーへの祈りを捧げている。そして最後まで、クンタ・キンテは「アフリカ」を象徴する存在として、アメリカの子孫の間で語り継がれていくことになる。だが、八三章の最後の描写は、クンタ・キンテの死を予測するものであるが、それと同時に、クンタ・キンテのイスラーム教の神、アフリカ文化への断絶を暗示する描写になっている。それは、娘のキジーが奴隷の逃亡を幇助した廉で逮捕され、娘と離れ離れになってしまう場面であり、『ルーツ』が、この章を境にクンタ・キンテの物語からキジーの物語へと展開していくところである。

クンタ・キンテが、娘のキジーに教えた時間の記録のしかた、それはひょうたんに小石を入れるアフリカの伝統にのっとった作業だった。キジーに永久に会えないことを悟ったクンタ・キンテは、ひょうたんを手に取り、床に投げつけて壊してしまったのである。それはアフリカへの決別の儀式であり、奴隷というアメリカでの厳しい現実認識を迫られる場面であった。「目から涙が滂沱のごとくあふれ出た。重いひょうたんを頭上高く掲げ、大きく開いた口からは声にならない叫びが漏れ、力の限りひょうたんを投げつけた。ひょうたんは、堅く締まった地面にあたって、粉々に砕け散った。クンタ・キンテの六六二個の小石は、五五雨（年）の各月をあらわしていたが、四方八方へ激しく飛んでいった」（453）。

アフリカ式暦を壊してしまうという行為は、アフリカという過去への決別にほかならない。クンタ・キンテの子孫たちは、この後、アメリカ南部の奴隷制度の抱える、さまざまな問題にまさに直面していくのであり、アフリカはもはや見知らぬ遠い存在でしかなくなっていく。

このようにして、奴隷たちはアフリカ人であることを、先祖がイスラーム教徒であったことを忘れていったのである。繰り返して述べると、アフリカ人のルーツを求めた作者が、自分の祖先がイスラーム教徒であったのは偶然であったにしても、アッラーを信仰するばかりでなく、聖者の家族であったことを強調しているところに、私たちは注意を払わねばならない。

ここで強調しておきたいことは、アメリカ社会におけるイスラーム・プレゼンスが、二〇世紀になって始まったのではないということである。『ルーツ』のクンタ・キンテが、アメリカへ連れて来られたのは一八世紀の半ばだったが、北アメリカにやってきた最初のイスラーム教徒で記録が残っているのは、エスティヴァンという名前のモロッコの黒人奴隷である。一五二七年、エスティヴァンはガイド兼通訳として、スペインを経由してフロリダへ渡ってくる。パンフィロ・デ・ナルバエス探検団と行動を共にし、今日のニューメキシコ、アリゾナを調査した（ターナー、11）。その生涯については、小説化された作品ではあるが、ダニエル・パンガーの『ブラック・ユリシーズ』によって推測することができる。エスティヴァンは、先住民インディアンの居住する地域へ入っていった、最初の非インディアンであると見なされている（パンガー、3）。リチャード・ブレント・ターナーは、「アメリカにおけるイスラームは、一九世紀において比較的まれな現象であったが、それでもたしかに一六世紀初めからイスラーム教徒の存在は続いている」（12）と述べている。

ターナーはその具体的な例を挙げている。『アフリカン・アメリカンの体験とイスラーム』（一九九七、二〇〇三改訂版）のなかで、南北戦争以前の南部には、イスラームの伝統を守りながら暮らしていた黒人奴隷がいたことを、何人かの例を挙げて記述している。かれらのなかには、子供たちにイスラーム風の名前をつけ、イスラームの食事戒律を守り、イスラーム風の帽子を被り、外部の者とは英語を話すが、家族の中ではアラビア語を使い、アラビア文字を書くことができた者もいるという。一九世紀のアメリカで、「イスラームの自己証明とその伝統を保つ目的で、奴隷による小さなイスラーム・コミュニティが存在していたという、断片的な記録がある」（35）とも述べている。『ルーツ』のクンタ・キンテは一人ではなかったのである。

イスラームの伝統が、比較的保ちやすかったのは、クンタ・キンテのヴァージニア州のような大陸ではなく、ジョージア州の沖合いに連なるシー・アイランド群のように、白人社会から隔絶した地域に連れて来られた奴隷たちだった。その一人に、サペロ島に来たビーライ・モハメットがいる。モハメットのひ孫が、一九三〇年代に行われた連邦作家救済プロジェクトの聞き取り調査に答えて、「ビーライは、一九人の自分の子供たちに、イスラームの名前を与え、イスラームの伝統を教え込んで、自分自身のアイデンティティを保っていた」（33）と語っている。ひ孫の世代まで、イスラームの記憶があるという事実は、今、明確に認識しておく必要があるだろう。キリスト教徒がアメリカ大陸へ入って来たのとほとんど同じころに、イスラーム教徒もまたアメリカへ入って来ていたのだった。キリスト教とは違って、イスラーム教がアメリカ社会の統治者の宗教ではなかったがために、また人口的にも多くなかったがために、その存在は沈黙を強いられ、やがて記憶は

喪失していったのである。

今日のイスラームの変遷

それでは今日のアメリカ社会における、イスラーム教徒・イスラーム共同体の前史をなす時代はいつごろなのか。それは一九世紀後半の、パン・アフリカニズムの思想的流れと、ヨーロッパの政治的経済的現状を逃れて、アメリカへの移民が増加していった二〇世紀の転換期にかかわっている。前述のイスラーム研究者ジェイン・I・スミス著『アメリカのイスラム』(1999) によれば、移民第一期を一八七五年から一九一二年にしている。そのころ、今日のシリア・ヨルダン・パレスチナ・レバノンにあたるグレイター・シリアの地方に住む人々が、オスマン・トルコ帝国の圧政を逃れてアメリカへ移住している。ほとんどがキリスト教徒だったが、そのうちのごく少数をイスラーム教徒が占めていたという(スミス、51)。かれらはスンニー派、シーア派、アラウィー派、ドゥルーズ派だったが、アメリカ社会で特に顕著な存在として記憶はされていない。

次の波は、第一次世界大戦後だったが、アメリカ合衆国では、一九二四年に厳しい移民法が成立し、日本などアジアからの移民は締め出され、この法律はまた中近東からの移民も制限した。それゆえ二〇世紀前半においては、ごく短い期間にやってきたイスラーム教徒がアメリカ社会のなかへ入っていったのみであった。

いっぽう、一九〇〇年代の初めには、中西部にすでにイスラーム共同体があったと言われており、一九〇七年には、ニューヨークに最初のアメリカ・モハメッド協会が設立されている。だが、現代のアメリカのイスラーム・プレゼンスを考えるときに、大きな存在として最初に認識されたのは、一九一三年、ニュージャージー州ニューアークに作られた、ムアリッシュ・サイエンス・テンプル・オブ・アメリカである(ターナー、71-72)。創立者は、ティモジー・ドゥルー(1886-1929)で、ノーブル・ドゥルー・アリと名乗っていた。ノース・カロライナ州生まれのノーブル・ドゥルー・アリは、ニュージャージー州へ出ると、独自の宗教を唱道し始める。自分はモロッコへ旅行した折りに、モロッコ王からアフリカン・アメリカンをイスラーム教徒に改宗するように命じられたと説明した。そして「ムアリッシュ・サイエンス・テンプル・オブ・アメリカの聖なるコーラン」を編み出し、ムアリッシュ・アメリカンに配布したが、それはイスラームの経典(コーラン)とはまったく別の書物であったという(スミス、79)。その教えは、素朴で「愛・真実・平和・自由・正義」を原理としていた。おそらくその素朴さゆえに、教育のないアフリカン・アメリカンたちに受け入れられやすかったのだろう。ノーブル・ドゥルー・アリは、かれらの自信を取り戻させるように、白人が押しつけた名称を捨てよと説いたのだった。ニグロやカラードというような蔑称、奴隷時代の名前は白人が生み出したものであり、それらを捨てて誇りと威厳を持つように促した。そして黒人本来の「アジア的出自」を記憶すべきであると警告したのだった(スミス、79)。

今日、信奉者を増やしていったアメリカのイスラーム教に共通する特徴を、ムアリッシュ・サイエンス・テンプル・オブ・アメリカは備えていたとターナーは述べている。その特徴とは、アフリカン・アメリカンを信者の対象としていることであり、「都会性、反キリスト教、

マルティカルテュラル」(72) であった点であり、さらに自分たち独自の「コーラン」を編み出したところである。

寺院の名称はさまざまに変化したが、ノーブル・ドゥルー・アリを中心とするムアリッシュ・ムーヴメントは発展し、一〇年間に約三万人の信者を獲得するようになったという。テンプルは、中西部の都会のデトロイト・ピッツバーグ・シカゴ・ミルウォーキーなど、東海岸のフィラデルフィア・ボルティモアなどで設立されていき(ターナー、92)、一九二八年には第一回ムアリッシュ全国大会が開催されている(スミス、79)。

パン・アフリカニズムの政治性を帯びていたこの組織は、アラブや東欧のイスラム教国からアメリカへ移民してきたイスーラム教徒からみると、胡散臭い存在だっただろう。だが後の、「ネイション・オブ・イスラム」の原型はここに認められ、後述するファードもイライジャ・ムハマドもムアリッシュ・テンプルの会員であったと言われている。ノーブル・ドゥルー・アリによる、「アメリカ的イスラーム」という変形が、社会に認識されたのである。

二〇世紀になって初めて大きな組織になったムアリッシュ・テンプルは、同時に、一九一〇年代から盛んになってきていたマーカス・ガーヴェイ運動と連動しながら、アメリカ社会の黒人を対象として、パン・アフリカニズムの思想を広めていった。ジャマイカ出身のマーカス・ガーヴェイ(1887-1940)は、国外退去になり、ノーブル・ドゥルー・アリは、一九二九年に逮捕・釈放された直後に不可思議な死を迎える。それだけこの寺院、およびその組織がアメリカ社会で意味を帯びるようになってきたと解釈することが可能だろう。統治者にとって、かれらがいささか厄介な存在になってきていたのだった。

いっぽう、世紀転換期にやってきたイスラーム諸国からの移民たちは、ごく限られた人口を形成しているに過ぎなかった。アメリカ社会でイスラーム共同体が単発的に存在していても、社会に影響を及ぼすことはほとんどない。まして何らかの形で、何らかの程度において、アメリカ社会を支配することはまったくなかった。ある程度の人口増加があって初めて、その存在が明瞭になってくるのである。かれらは、静かに、個人的にその信仰を守ってはいても、大家族が身を寄せ合って暮らすのではなく、数の上で少数で、地理空間的にもまばらな状況のアメリカでは、ラマダンの断食を守ることさえ容易ではなかっただろう。かれらは当然のことながら、アメリカ化せざるをえなかったのである。同時期に大挙して移住してきたユダヤ人の「ユダヤ・プレゼンス」ほど、アメリカ社会におけるイスラーム・プレゼンスは顕著ではなかった。

3　二人のイスラーム組織創設者

W・D・ファード(1891?-1934?)　二〇世紀のアメリカにおいて、イスラーム・プレゼンスが明らかな存在になっていくためには、カリスマ的な人物を必要とした。「ネイション・オブ・イスラム」の最初の基盤を築いた人物は、W・D・ファードである。

W・D・ファードに関して、その生没年が定かでないように、人種的背景もまた定かではない。ファードはいったい白人だったのか、黒人だったのか。

ターナーはファードの次のような言葉を引用している。「わたしはW・D・ファードで、聖都メッカから参りました。あなたがたは、わたしが王族の衣を着ている姿をまだご覧になっていないでしょう」（ターナー、147）。このように語るファードは、自分の出自をイスラームの正統なる継承者であり、なおかつ高貴な生まれであるかのように見せている。だが王族だとは断言しないで、「王衣（ロイヤル・ローブ）」を着ている姿と説明するところが、ファードの背景をぼやかしているのである。そしてファードが嘘を言っているわけではないということにもなる。肌の色が浅黒かったといわれるW・D・ファードが、自分はアラビア商人であると名乗れば、それはすぐに信じられただろう。アメリカのような移民の国では、自分が自分のことを説明しないかぎり、だれにもわからない。名前にはじまって、いくらでもフィクションが生み出される状況があったのであり、それは今でもある程度において、アメリカ社会の現実である。ファードはアメリカで生まれたのかもしれないが、また中近東で生まれたのかもしれない。それすらはっきりしていないが、ミシガン州のデトロイトの黒人居住区を回る、衣料のセールスマンだったことは事実のようである。

二〇世紀の初頭のアメリカでは、アラブ人の移民たちが、セールスマンとして各地を渡り歩いていた（ターナー、147）。ニューヨークに中近東の貿易バザールがあり、そこで仕入れて、アメリカ各地をセールスしていたのだった。異国情緒たっぷりの色鮮やかな衣類・絹織物・刺繍物・香料を売りながら、いっぽうで遠いイスラーム世界の不思議な物語をすると、貧しい黒人たちは大いに喜んだという（ターナー、147-149）。「バグダッド」とつぶやけば、その異国情緒たっぷりの名前に魅力を感じて、品物をつい買ってしまったかもしれない。ニューヨーク・トリビューン紙（一九八二年一〇月二日）によれば「聖職者の肩衣（スカプラリオ）やロザリオ、ビーズや祈祷書は、安物コロン水や貝殻の飾り物の下に埋もれてしまって、見えないくらいだった」（ターナー、147）そうであり、宗教関係の品々よりも、アメリカでは手に入らない、色とりどりの美しい布地やスカーフなどが人気だったようだ。かれらは商人であり、かならずしもイスラームの宗教を広めようとしていたのではなかった。

実は、W・D・ファードというその名前さえ確実な名前ではない。W・D・ファードの他に、W・D・ファラッド、ファラッド・ムハマッド、ワーリ・ファード、ワーリ・ファード・ムハマッドなど、名前に関してのさまざまな憶測がある。その人種に関して、ファードはいったい黒人だったのか、白人だったのか。白人だったという説もある。さらに、ファードはアラブ商人だったのか。それともイスラームの伝道師だったのか。それも定かではないのだが、前述のターナーは、商人の偽装をして、実は宗教伝道のためにアメリカに来たとみなしている。それでもファードについて回った形容には、「巷の行商人・麻薬売り・伝道師・予言者・囚人・偽者・詐欺師・社会改良家・アッラー・ヴードゥー教の指導者」（ターナー、148）などがあり、商人なのか、真面目な伝道師なのか疑わしい。だが、信奉者からすれば、巷の噂がささやかれるほどに、ファードの神秘性が増し、疑念を抱くよりは、その神秘性のなかに宗教的力を感じ取っていったのだろう。アメリカの黒人のために神の言葉を伝えにきたということ、そしてアメリカの黒人が古代の失われた民族の一つであったというエリート性だけで、アフリカン・

アメリカンは十分に説得されたのかもしれない。それほどアメリカ社会の黒人への差別が酷かったという証でもある。

このいかにも謎が多すぎる人物は、やがて「ネイション・オブ・イスラム」の指導者になるイライジャ・プール（ムハマド）に出会ったとき、「自分は神によって地上に送られてきた神の化身であるが、これはだれにも言ってはならない」（アメリカ宗教・政治百科事典、二〇〇二）と打ち明けたそうである。一九三〇年七月四日、デトロイトに姿を現したファードは、自分はメッカからやってきた者で、アメリカの黒人は、実は失われた古代の民族シャバズであり、その黒人たちにアッラーの言葉を伝えにきたというふれこみだったようだ（スミス、81）。そして「北アメリカの荒野で失われ発見されたネイション・オブ・イスラム」と呼ぶようになる寺院で集会を始めるようになる。

ファードはその後、名前を忘れられていくのだが、いつ死んだのかはっきりしていない。宗教家の死は、しかも新しいセクトの創設者の死であれば、その事実を隠さなければならぬ事情もあるだろう。黒人の優秀性を標榜する人種差別的な教えによって、民衆を暴力へ向かわせたという理由で、ファードはしばしば逮捕されたが、一九三三年五月四日に、遂にデトロイトから追放される。そして九月には、シカゴで騒乱罪により逮捕されたが、それが最後の公式記録になった。一九三四年以降は、まったく消息がつかめていないと、スミスは述べている（スミス、82）。だが本当に死亡したのか、姿を隠しただけなのかは闇の中である。イライジャ・ムハマドの息子のウォレス・ムハマドは、一九七六年の段階で、W・D・ファードはまだ生存していると語っている。「いつでも電話でW・D・ファードと話すことができる」と言っている（ニューズウィーク，一九七六年三月一五日号）。デトロイトに忽然と姿を現したファードは、また忽然と姿を消したのだった。

ファードの神秘性と、ウォレス・ムハマドが強調するような時空を越えた隠れた偏在性が、アフリカン・アメリカンたちの関心をさらに強めたのだろう。新しい宗教セクトは、世俗を離れ、人間の力を超えた神秘性・超人性を伴ってはじめて人々の心を動かすのである。

イライジャ・ムハマド（1897-1975）　ファードが創立した「テンプル・オブ・イスラム」は、やがて「ネイション・オブ・イスラム」の「テンプルNo.1」になっていく。そしてファードの第一の弟子であり、ファードから名前をイスラーム風に改名するように勧められたのが、イライジャ・ムハマドであった。イライジャはファードの勧めに従い、イライジャ・プールからイライジャ・ムハマドに改名して、二年後の三二年に、シカゴに「テンプルNo.2」を創設する。

W・D・ファードの信奉者になったイライジャ・ムハマドは、バプティスト派の巡回説教師の息子だった。マルコムXの父親がそうであったように、イライジャ・ムハマドの父親も、一九一〇年代・二〇年代の「アメリカの黒人」に、「アフリカへ帰ろう」と呼びかけて、多くの賛同者を集めたマーカス・ガーヴェイの運動に関わっていた。パン・アフリカニズムを唱えたガーヴェイは、ハーレムを中心にして黒人への影響を強くしていったが、その人心をつかんでいくガーヴェイの魅力・魔力に当局は恐怖を感じるようになり、郵便法違反という、いわば別件逮捕でガーヴェイを収監し、後には、出身地のジャマイカへ強制送還することになる。アメリカでは、とりわけ黒人運動と当局との緊張関

係は微妙だった。過去の奴隷制度の歴史、そして奴隷解放後に具体化し、激しくなっていく「アメリカの黒人」差別法（ジム・クロウ法）を潜ませているアメリカ社会では、白人と黒人の対立が、ただ肌の色の違いという人種的な問題だけではないのである。

ファードの場合と同じように、「ネイション・オブ・イスラム」の存続においても、当局との「協調」というのは大きな問題であったに違いない。後に、マルコムXが、イライジャ・ムハマドにより「ネイション・オブ・イスラム」を破門されるのも、ケネディ大統領の暗殺に関するマルコムXの政治的発言が原因であったということになっているが、組織と政治的活動の平衡状態追求とともに、組織の指導者として、おそらく微妙に当局と「協調」しなければならなかったからなのだろう。かつて一九世紀の前半に、アメリカ植民協会が設立され、解放奴隷をアフリカ大陸へ帰還させる活動が盛んになったことがある。差別されるアメリカ社会に暮らし続けるよりも、生まれ故郷のアフリカ大陸へ戻ったほうがしあわせであろう、という単純そして無謀な発想で始まったこの活動は、ある程度の実質的成功を収める。それに関しては、ストウ夫人の『アンクル・トムの小屋』でも語られているが、この協会が、「アフリカ帰還」を望む黒人の手だけで発展するはずはなかった。統治者である白人の背後の力がなければ、創立はおろか存続も成功もおぼつかない。アメリカ社会という白人社会のなかに発生する活動が、何らかの形で、当局と関わらないはずはない。当局と「協調」しないはずはないのである。

グレイト・マイグレーション（大移動）　ここでいささか本論から外れるかもしれないが、「グレイト・マイグレーション（大移動）」について触れておかねばならない。二〇世紀前半のアメリカ社会の黒人を論じるときに、注意しておかねばならないのは、この時期、黒人の間に大きな地理的移動が発生したことである。一九一六年頃に始まるとされる「グレイト・マイグレーション（大移動）」は、アメリカ社会における白人と黒人の緊張関係に変化をもたらした。第一次世界大戦の勃発により、ヨーロッパからの白人移民労働者の確保が難しくなり、また北部における工業の発展により、労働者を必要とした北部資本家たちは、南部にリクルートに出かけ、貧困にあえぐ黒人を北部の大都会へと誘っていった。シカゴ・デトロイト・ピッツバーグ・ニューヨークなどの黒人人口が急激に増加したのは、この時期だった。

アメリカという差別社会で、都会と白人の環境に晒される黒人たちが、精神の安定を新しい宗教に求めるのは自然の成り行きだった。この時期のニューヨークでは、ファーザー・ディヴァイン（1877-1965）と称した黒人のキリスト教宗教家が、多くのアフリカン・アメリカンの支持を得るようになった。既成の黒人教会からは逸脱し、同派はファーザー・ディヴァインを神の化身としてあがめるようになっていった。

このような新しい宗教セクトが人気を得るようになったのは、これまでのキリスト教会では、かれらアフリカン・アメリカンの心をつかめなくなっていたという証であり、そこに「ネイション・オブ・イスラム」の発生してくる土壌があったと言えるだろう。北部への大移住によって、黒人と白人の関わりがより密度を増し、それとともに、相互の緊張関係が日常的になっていったのである。奴隷解放令が発布さ

れて半世紀以上たったこの時代に、ようやく奴隷解放令の意味と結果が、アメリカ社会を左右するようになったのである。そしてその緊張から、多くのアフリカン・アメリカンが宗教組織に慰安を求め、組織を通して共同体への帰属感を求めていったのである。

どうしようもない差別に苦しむアフリカン・アメリカンにとって、支配階級の白人の宗教であるキリスト教が、自分たちの心を満足させるはずもなかった。いつでも頂点に白人を戴くキリスト教会では、奴隷ではなくなっても、やはり従属する存在に押し込められる自分たちの境遇に、不満を持たないはずはない。さらに、神は白人でしかありえないと教え込まれていたなかで、W・C・ファードのように、黒人が神の化身になりうることを知ったのである。このような発想は、奴隷時代の黒人にはもちろん、一九世紀後半からの差別法に縛られた「アメリカの黒人」には考えられないことであった。

「ネイション・オブ・イスラム」の神学　イライジャ・ムハマドが焦点を当て操作しようとしたのは、このような黒人が抱く白人の宗教への不満であった。キリスト教の神も、その子イエス・キリストも白人であることへの苛立ちである。それゆえイライジャ・ムハマドが強調したのは、黒人を含み入れるばかりでなく、黒人を中心に置く宗教を「考案」することであった。「すべてのイスラーム教徒はアッラーである」と述べ、「最高のアッラーが最高存在であり、それ自身の名前を持っている。それはファード・ムハマドである」（ムハマド、56）と述べているイライジャ・ムハマドは、W・C・ファードの誕生日、二月二六日を「救世主の日」として祝日にしたのである。

アッラーの神を抱くことにおいては、アラビア半島に生まれたイスラーム教とその基盤を同じくしている。けれどもアメリカの「ネイション・オブ・イスラム」が、きわだって異質であったのは、白人に対する考えかたであった。この点において「ネイション・オブ・イスラム」は、きわめてアメリカ的な現象であったと言えるだろう。奴隷制度の歴史を経て、なおそれを社会の問題として抱えているアメリカ社会に誕生した宗教組織であった。

「ネイション・オブ・イスラム」の神学教義によれば、黒人は、「六〇兆年前に、地球に現れた最初の人間」であり、「すべての人間はシャバズ族のメンバーであった」ということになっている（リー、28）。この部族は長年の間、平和に暮らしていた。だが、六千六百年前に誕生したヤークブ（Yakub）という男が、宇宙の原理を発見した。その原理とは、「同じでないものは引きつけあい、似通ったものは反発しあう」ということであり、それをヤークブは社会生活の場面に当てはめて考えた。そして人々に対して絶対権力を握るには、「同じでない人間」を創造しなければならないと思いつくのである。この思想をメッカの町で広めようとしたために、ヤークブとその追随者はメッカから追放されてしまう（リー、28）。そのようにイライジャ・ムハマドは、『アメリカの黒人へのメッセージ』で述べている。そこで腹いせにヤークブは、部族の人々を奴隷にしてしまえ、と企む。ヤークブは、劣性遺伝子をかけ合わせながら、劣性遺伝の白人種を生み出すことに成功する。かくして、優秀な黒人種に呪いと試練を与えるために、白人は創造されたのだった。肌の色が白いのはまさしく劣性の証であり、ゆえにかれらは悪魔である、というのが「ネイション・オブ・イスラム」の神学

になっていった（スミス、83）。本来は、平等主義・普遍的な愛がイスラームの根本思想であったはずである。ところが、「ネイション・オブ・イスラム」組織が、アフリカン・アメリカンの関心を呼んだ理由の一つは、白人は劣性遺伝で悪魔であるという神学的根拠があったからだろう。アメリカの差別社会で人間性を無視された生活をしている黒人にとって、白人のほうが劣性であり、黒人のほうが優秀であるという、これまで想像もしなかった発想の転換に驚愕したにちがいない。そして、精神的自己を取り戻すきっかけになったことだろう。白人が弱く、道徳的にも劣性で、逆に黒人が強く、精神的にも優秀であるという教えはいかに極端に響こうとも、二〇世紀の黒人にとって自己を確認するために、アメリカ社会での存在証明を確実にするために、必要な第一歩だったのである。

イライジャ・ムハマドが作り出した、「ネイション・オブ・イスラム」の教えで重要なのは、その生活原理である。「倹約・勤勉・貯蓄」という三点をイライジャ・ムハマドは強調している。これは、やはりアメリカ社会で成功した宗教団体、「末日聖徒イエスキリスト教会」の生活原理と一致する。新興宗教団体の存続は、まずいかなる場合においても、経済的基盤の確保にかかっている。それを信仰心とからめて説いていくのである。その次は、生活改善である。健康でなければ健全な社会生活は営めない。食生活の改善を目的とする戒律が決められていった。酒・タバコ・コーヒーのような刺激物・嗜好品は、健康維持のためには不必要であるし、また余分な出費を避けるためにもタブーとされた。その他、豚肉・とうもろこしパン・チトリン・ササゲ豆などが禁忌とされたのは、これらがすべて南部を代表する食べ物であり、すなわち奴隷時代の名残であると考えられたからであった。

豚肉に関しては、「ネイション・オブ・イスラム」に限らず、イスラームの教えで禁忌になっているが、「ネイション・オブ・イスラム」の場合は、宗教的のみならず政治的要素が入りこんでくるところに、その特質があるだろう。南部の食べ物が奴隷制度と関連して記憶され、それは白人の支配を思い起こさせることへつながっていく。食事に関する戒律のみを取り上げても、「ネイション・オブ・イスラム」は、奴隷制度および支配する白人社会というアメリカの歴史と密接に関わっているのである。アメリカにおけるイスラームが、特殊化する必然があったと言えるだろう。

イライジャ・ムハマドは、「ネイション・オブ・イスラム」の宗教的関心を高めるために、大きな予言をしている。それは、一九六五年あるいは六六年に、白人支配は終焉を迎えるという予言である。そしてその前兆として、「アメリカ・ドルの下落」、「核戦争の脅威」、「カンザス州とテキサス州の旱魃」を挙げている（リー、34）。予言をした六〇年代前半は、アメリカ社会が揺れている時代だった。アフリカン・アメリカンに関しては公民権法を巡る政治運動が活発になった時代であり、六〇年代の半ば頃には、ヴェトナム戦争の悪化が全国的に認識されるようになっていった。後半になると、反体制の勢力が目立って発言をするようになり、アメリカの体制側は、そしてアメリカ社会は、五〇年代の自信を喪失し、不安定な時代に入っていった。その直前に、イライジャ・ムハマドは、白人支配の終焉を予言したのである。貧しく抑圧されているアフリカン・アメリカンが心を動かさないことはない。夢であってもいいから、かれらは白人に支配されない社会を感じ

取りたかったであろう。

当然のことながら、イライジャ・ムハマドの予言が現実になることはなかった。それでも信者が減少しなかったのは、公民権運動が成功したためではなかっただろうか。アメリカの黒人は、公民権法によって選挙権を確実にし、未来へ向けての希望を託すことができたのである。さらに戦闘的なブラック・パワーが登場してきており、六六年には組織化されているから、この時代はアメリカ社会における黒人の声が、歴史上、例を見ないほど大きくなっていったのである。

イライジャ・ムハマドの一番弟子であり、一時期はその後継者と見なされたマルコムXが、一九六五年に暗殺される。イライジャ・ムハマドは、その後、一〇年生き長らえて、「ネイション・オブ・イスラム」の指導者の位置を保持し続けた。一九七〇年代になると、その戦闘的な姿勢は、アメリカ社会の変容とともに、少しずつ調子を落としていく。とはいえ、「白人は悪魔だ！」という考えと、「アメリカの崩壊」や白人支配の終焉への考えを修正したのではなく、基本的には、黒人社会の到来を信じていたのであろうが、それでも現実的には、白人と実戦を構えるよりも、アメリカ社会で「ネイション・オブ・イスラム」が存続することをまず第一に考えていった。

何万人の信者を抱える組織の指導者として、イライジャ・ムハマドの信念と行動が、どこまで一致していたか、そしてどの程度の乖離があったのか。正確なところはわからない。けれども、マルコムXの「ネイション・オブ・イスラム」からの離反の理由の一つに、道徳を説く指導者の不道徳な男女関係の事実があったように、宗教組織の指導者の教えと行動は、かならずしも一致しない。イライジャ・ムハマドは、一九六三年、ケネディ大統領が暗殺されたとき、宗教組織から政治性を排除すべきであると主張し、マルコムXにケネディ暗殺に関するコメントの発表を禁じたのだった。だが、その真意は何だったのか。本当にそう信じていたからなのか。それとも政治に関与しない姿勢を社会に、統治者に見せるという身振りをしただけだったのか。イライジャ・ムハマド自身が、当時の当局者と政治的に関係を結んだことはなかったのか。それはありえないことだろう。社会的に大きな影響力を持つ組織の指導者であれば、何らかの形で、当局とかかわらざるを得ない。

一九七五年一月にイライジャ・ムハマドの体調が悪化し、シカゴの病院に入院する。マーサ・F・リーの『ネイション・オブ・イスラム』によれば、全米の市当局者が、さまざまにイライジャ・ムハマドの功績をたたえようとした（リー、55）。シカゴ市長のリチャード・デイリーは、「ネイション・オブ・イスラム」の「救世主の日」である二月二六日を、シカゴ全市において、「ネイション・オブ・イスラムの日」と指定した。蛇足ながら、二月二六日はファードの誕生日とされているが、もちろん真偽のほどは定かではない。その他の市長たち、オークランド・バークレー・ロスアンジェルス・ゲアリー・ニューアーク・アトランタが、同様にイライジャ・ムハマドの功績を認知し、賞賛している。

「ネイション・オブ・イスラム」の本部があるシカゴの新聞、シカゴ・ディフェンダー紙は、次のような論評を載せている。

「ムスリムの教えを通して、何千という人々が、犯罪・麻薬中毒・堕落した暮らしから救済された。ムスリムの宗教教義（イデオロギー）を全面的に諒解するのではないが、自己発展の原理をこれまでにないほど引き上げたことは認めねばなるまい」（リー、56）。

イライジャ・ムハマドをわざわざ認識し、なおかつ「ネイション・オブ・イスラム」の祝日をもって、一九七五年のその日を特別な「イスラームの日」と認定したその裏に、イライジャ・ムハマドおよび「ネイション・オブ・イスラム」と白人支配者層との協調体制が読み取れるのではないか。そうでなければ、ムスリムの「宗教イデオロギー」を認めていない白人市長のデイリーが、ブラック・ムスリムの祝日を「ネイション・オブ・イスラムの日」にするなどという政治的身振りは思いつかないだろう。白人支配社会の当局者たちとイライジャ・ムハマドが、どのような「協調」関係を結んでいたのかは不明だが、デイリー市長のこのような特別措置に、イライジャ・ムハマドとの特殊な関係は容易に推測できる。

イライジャ・ムハマドは、「ネイション・オブ・イスラムの日」の前夜、病院で息を引き取る。デイリー市長の政治的措置に見られるように、イライジャ・ムハマドと「ネイション・オブ・イスラム」組織は、すでに重要な位置をアメリカ社会において占めるようになっていた。イスラーム発生の地である中東のイスラームから、いかに遠く離れていようとも、「ネイション・オブ・イスラム」はアメリカ的イスラーム・プレゼンスとして、もはや無視できない存在になっていったのである。

引用文献

Haley, Alex. *Roots: The Saga of an American Family*. New York: Random House, 1976.

Lee, Martha F. *The Nation of Islam: An American Millenarian Movement*. Syracuse: Syracuse UP, 1996.

Muhammad, Elijah. *Message to the Blackman in America*. Chicago: Muhammad Mosque of Islam No.2, 1965.

Panger, Daniel. *Black Ulysses*. Athens, Ohio: Ohio UP, 1982.

Smith, Jane I. *Islam in America*. New York: Columbia UP, 1999.

Turner, Richard Brent. *Islam in the African-American Experience*. Bloomington: Indiana UP, Second Edition, 2003.